博士論文の要約

近代日本・中国における女性同性愛

—性科学の受容から 1920 年代女性主体表現まで—

名古屋大学国際言語文化

国際多元文化

鄒韻

要　約

本論は近代日本と近代中国における「同性愛」概念の浮上に着目し、性科学・言説・文学において女性同性愛がいかに語られるのかを明らかにしようとする試みである。とりわけ、明治末期から大正期にかけての日本、そして 1920 年代の中国を中心に、性科学の浸透による「同性愛」をめぐる言説、及び女同士の愛を描く女性作家の文学テクストに目を向けて、これまでアカデミズムで数多くなされてきたセクシュアリティの歴史研究とレズビアン文学研究の一つとして本論を位置付けたい。

本論はヨーロッパにおける同性愛の歴史を踏まえた上で、以下の三つの問題点を提示した。**まず、同性愛が犯罪視されなかった日本と中国の文脈における性科学の導入とその位置づけという問題である。**つまり、日本と中国に導入された同性愛に関する性科学の研究は、自発的に法律の犯罪化に抗するもの、あるいは同性愛の解放の一環として機能していたのではない。だとすると、西洋からの性科学は、日本と中国の歴史文脈にいかなる「知」として導入され、位置づけられていたのだろうか。これは本研究の最初の問題設定である。

二つ目は同性愛言説の浮上とともに女性同性愛が問題化されていくことである。これまでの歴史では、同性愛の犯罪化及び脱犯罪化の中心となっているのは、つねに男性同性愛である。一方、女性同士の愛は不可視化とされてきた。しかしながら、日本と中国では果たしてヨーロッパと同じように女性同性愛は「不可視化」されていただろうか。

本論は、この疑問に対して否と答えた。ただし、ここで言う日本と中国における女性同性愛の可視化とは、レズビアンの自己表現の可視化ではなく、語られる事件としての可視化である。そして、われわれが現在使用している「同性愛」（中国の民国期でも“同性愛”や“同性恋愛”等が使用されていた）という言葉、最初、男性同士の親密な関係ではなく女性同士の親密な関係を指し示すものとして使用された。性科学が氾濫していた時期は、日本では明治末期から大正期、中国では 1920 年代頃であった。この時期には、フェミニズム運動の勃興とともに女学生や新しい女性が登場し、女性のセクシュアリティの解放が徐々に問題化されていた。そこで、西洋からの性科学は同性同士の性行為のメカニズムを解明する医学の知識として機能していただけではなく、新しい女のセクシュアリティを研究・究明する「知」としても機能していたと本研究は主張した。

また、日本と中国における女性同性愛の問題の中で、とりわけ当時の知識人に注目されたのは女学生同士の親密な関係であった。女学生は新たな時代を象徴する記号であり、セクシュアリティを厳格に管理される良妻賢母の予備軍でもあった。そこで、女同士の親密な関係がいかに友情・同性愛という境界線で区分され、女性同性愛というカテゴリーがどのように構築されていくのかを分析した。このような歴史的文脈に基づき、**本論の三つ目の問題点は、文学研究において下位文化とされてきた女学生・女性同士の絆を語る文学テクストの読み直しである**。女同士の親密な関係を描く様々な文学作品は、歴史的には語られる客体としてあった女同士の愛を、女が女のために書くサブカルチャーという形で開花させた。これまで文学研究において看過されてきたこれらの作品を照射した。歴史的に不可視化されてきた女同士の絆を女性作家たちが文学を通して描く作品を掬い上げた。さらに、このような文学テクストにおける女であることやレズビアンであることの自己形成の可能性を探ってみた。

次に、本研究の具体的な内容を示す。本論は二部構成となる。それぞれにおいて、近代日本・近代中国における性科学の受容、「女性同性愛」をめぐる言説、女同士の愛を語る文学を分析対象としている。

●第一部：

第一章「性科学によって語られる女性同性愛—明治末期から大正期にかけて」では、明治末期から大正期にかけての西洋の性科学の導入を分析対象とする。具体的にはクラ

フト＝エビング、ヘンリー・ハヴロック・エリス及びエドワード・カーペンターの三人に焦点をあて論じた。ホモセクシュアリティの概念は、明治開化セクソロジーとともに導入された。この時期では、肛門性交を意味する日本語の「鶏姦」と西洋の「ホモセクシュアリティ」を意味する「同性に対する情慾」（クラフト＝エビング・『色情狂編』）が併存している。しかし、大正期の通俗性欲ブームに至って、「ホモセクシュアリティ」は「同性色情」や「同性性欲」と訳されるようになり、さらに「同性愛」という言葉が定着していった。近代日本におけるクラフト＝エビング論は、最初専門的な医学知識として受容されたが、次第に通俗化し、徐々に大衆化されていく。生殖を目的としない同性に対する性欲は性的倒錯として見做されるようになった。クラフト＝エビング論は、近代日本における同性愛をめぐる言説の医学的な基礎であったと言えるだろう。

一方、大正期に入ってエリス論とカーペンター論は、イギリスの言説と異なって、女性の問題を軸にして対峙的な言説として受容されていった。「女性同性愛」に関してエリス論はクラフト＝エビングの性倒錯論を踏襲しており、それが『青鞜』に掲載されることでフェミニズム運動における女性同性愛の病理化を強化した。一方カーペンターは、男性同士の同性愛問題が少女同士の親密な関係に置き換えられることによって、精神的な女同士の「同性愛」を擁護する理論として受容された。

第二章「「お目」から「同性愛者」へ—女学生同士の親密な関係をめぐる言説」では、明治末期から大正期まで、性科学の浸透によって女性同士の親密な関係がいかに変容していくのかを考察した。まず、女学生の登場とともに女学生同士の交際が「お目」と称された当時の言説を明らかにした。女学生同士の恋愛は、あくまでも文明開化に伴う「女学生」の問題、自由恋愛の問題に回収されたとみられる。しかし、1911 年新潟県の女学生心中事件をきっかけに、「女学生」を問題の軸にすることから離れつつ、医学のまなざしから男色を内包するセクシュアリティの問題へ変化していくとみられるのである。最後に、1920 年の奈良女子師範大学の女教師と女学生の「同性の愛」事件を中心に、アイデンティティとして「同性愛者」がいかに歴史的に構築されていくのかを明らかにした。同性愛の問題が個人の性の問題へと転化し、性的倒錯の医学理論に基づく男らしい「女性同性愛者」に注目されるようになったのである。

次いで、**第三章「語りえぬものから聞こえぬものへ—吉屋信子の『花物語』の変遷と**

受容について」である。第三章と第四章においては、女同士の絆を語る女性作家、吉屋信子を中心に論じた。1916 年から 1924 年にかけて、『少女画報』に掲載された吉屋信子の少女小説『花物語』は戦前の女性にとってのバイブルと呼ばれるほど一世を風靡した人気作品である。52 篇の短編小説としての『花物語』シリーズは、少女同士の恋愛を描き、同時代の少女文化のシンボルでもあった。作者は少女雑誌という場に語りえぬものが存在し、連載中にも関わらず外部への投稿を求めていた。テクストにおいては、初期・中期・後期にかけて、徐々に両義的な意味が生み出される。一方、読者は作品を読む「解釈共同体」を形成し、テクストにおける逸脱する意味を抹消させ、『花物語』=涙ぐましい意味を付与させている。このように、作家が語ろうとするテクストの逸脱性は、雑誌の「読み」によって体制に合致するジェンダー規範に収斂されてきた。少女雑誌という場で語りえぬものは、難解なテクストとなり、さらに解釈共同体である読者の「読み」によって聞こえぬものとなった。

第四章「「同性愛者」の語り—吉屋信子の「屋根裏の二処女」と「或る愚しき者の話」を中心に」では、吉屋信子の『屋根裏の二処女』（1920）と「或る愚しき者の話」（1925）を中心に、医学的な言説との交渉の中で近代の女性同性愛者という表象が如何に描かれているのかを分析した。『屋根裏の二処女』は、先天的な食欲の欠如と閉塞的な空間をメタファーとし、性科学を受容した同性愛の主体成立の出発点を描いている。空間の重層性によって、流動するアイデンティティを表象するとともに、アイデンティティの亀裂と生成を象徴する。さらに、一九二五年に発表された「或る愚しき者の話」では、性科学との明確な交渉を描き、医学的言説を内面化しつつ、レズビアンである主体生成の亀裂を表象している。「同性愛者」を語る際の「語りにくさ」と不安定なアイデンティティの揺らぎは、アイデンティフィケーションにおける「自認」と「クローゼット」との間隙に主人公の同性愛欲望を一時的に保留=封印した。

第二部：

第一章「近代中国における性科学の受容」では、クラフト＝エビング、エドワード・カーペンター、ハヴロック・エリスという受容の順序について考察を行った。まず、清末期におけるクラフト＝エビングの翻訳を焦点に当て、日本の開化セクソロジー期に当

たる中国での性科学の受容を考え直した。次に、20 年代の中国に大きな影響を与えたエドワード・カーペンターの「同性愛」理論がどのように訳され、読まれたのかを論じた。続けて、「同性愛」の問題に対して対峙的な言説として流通したクラフト＝エビング派とエドワード・カーペンター派の論争から、1930 年に刊行された『同性愛問題討論集』を中心に、そこで生じた「同性愛」意味の再構築を見てきた。最後に、ハヴロック・エリスの受容を辿りつつ、1944 年に刊行された潘光旦の翻訳の位置づけを示した。大正期に徐々に定着していった用語や概念、「顛倒色情」や「変態性慾」、「同性恋愛」、「同性愛」等は、中国の知識人によってそのまま中国語でも流通するようになった。ところが、 “同性愛”が語られるときには、「変態」、「顛倒」、「病理」などといった日本から導入された漢語が使用されるものの、それは文字上の意味にとどまるだけで、構造的な知識体系は空疎なのであった。

第二章「“同性愛”の浮上と変容—近代日本との比較研究を視座として」は、近代日本との比較を視座にして、1920 年代の中国において同性愛がどのように語られるのかを検討するものである。1920 年代の中国では以下の二つの問題をめぐって対立した言説がみられる。一つは学校教育における同性愛をめぐる議論である。つまり、男女別学という歴史的背景の下で、“同性愛”は一時的な行動として学校教育の中で予防すべき弊害であるのか、それとも男女の自由恋愛の前段階として性教育の一環なのか、という論争である。もう一つは、“同性愛”は婦人運動の延長線上に置かれる異性愛婚姻に対抗する女性知識人の問題とされ、これに関する賛否両論があったのである。この二つの対抗する言説はいずれも女同士の同性愛問題が焦点であり、女のセクシュアリティの解放やそれに対する警戒をめぐる議論が多くみられる。

第三章「語れない自己から自己語りへ—盧隠の『海濱故人』を中心に」は、茅盾の「盧隠論」を手掛かりとして、盧隠が 1921 年から 1924 年にかけて創作した作品、短編小説集の『海濱故人』を中心に、物語における自己語りが如何に変容していくのか考察した。茅盾が「社会熱気」が溢れていると称賛した短編小説は、反封建・反帝国主義等の様々な社会的テーマを題材とするものの、物語における「私」は、社会・国家という大きな物語に対して、空洞的な、透明な、性別がない存在となっている。1922 年以降、盧隠は今までの文学創作の物語の構造を放棄し、日記体と書簡体を用いて、五四期に苦悶する

様々な女性像を作り出した。本論は、自伝的な小説である「海濱故人」を中心に、自己表象である露沙の自己成長の物語として読んできた。廬隠は、主人公の露沙を通して、書き手として書くことへの再認識をし、さらに、異性愛制度に入り込めない葛藤に苦しむ未熟な娘の物語を描き出した。廬隠は、初期創作の段階において、民族・社会問題からフェミニズムの声を解放させ、女である主体の語りを探りつつあった先駆者として再評価されるべきだと考えられる。

第四章「回想録に見る「女性同性愛」の語りの行方」は、本章は、近代中国における同性愛をめぐる様々な回想録を発掘し、当事者たちはどのように思い出としての「女性同性愛」を語ったのかを考察した。1920 年代では、女同士の「同性愛」はすでに過ぎ去った美しい思い出として語られる。女学生たちは過去を追憶し、女学生時代に戻りたいという気持ちを告白した。一方 1930 年代に入ると、革命思想の風が激しく吹き、女同士の「同性愛」をめぐる言説も徐々に変化していく。女同士の「同性愛」は女学生時代の未熟で荒唐無稽な行為とされ、成長に有害であると語られるようになった。このような文学・歴史的な史料のさらなる発掘は今後の課題としたい。

以上の通り本論は性科学・言説・文学の考察を通して、近代日本・中国における性科学の受容の過程及び新しい女のセクシュアリティを管理する知としての性科学の役割を明らかにした。1920 年代、女同士の愛が批判された言説が流通した。このような言説に抗して、女性作家たちは女同士の絆をめぐって多様な主体表現を発信し続けていた。